

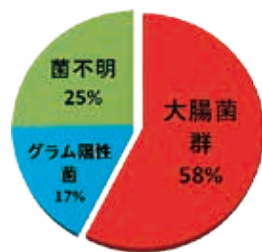
大腸菌性乳房炎

ワクチンによるアプローチ

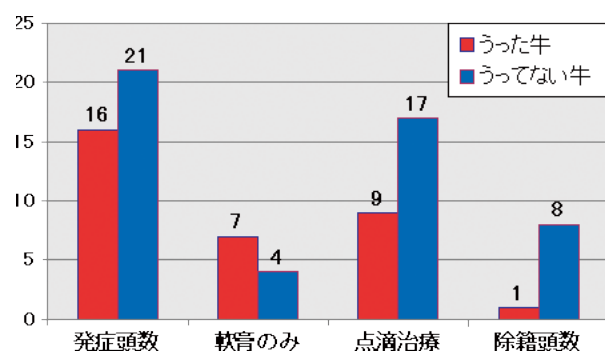
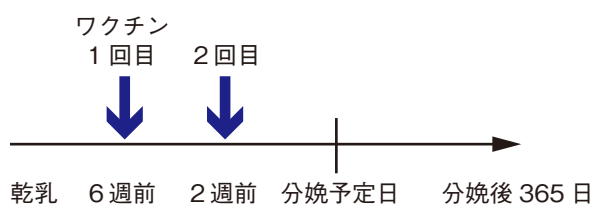
酪農家の皆さんは、大腸菌性乳房炎に対してどのような印象をお持ちでしょうか？「立てなくなる牛が出る」「わきどき出るが症状は軽い」「わが家では全く出ない」などと、農場間で発生状況や印象に大きな違いがあると思います。重症な場合は、起立不能・食欲廃絶・目の充血・低体温等の症状を示し、治療を行っても助からないことがあります。また、牛の命は助かっても乳があがってしまい、自家淘汰した経験はないでしょうか？たくさん乳がでてい

るほど重症となる傾向があり、酪農経営に与える影響は大きいと考えられます。そういつた中で、重症にならないようにできないかと考えていたところ、子牛の下痢予防のために「牛下痢5種混合不活化ワクチン」を使用し

ました。試験を行う1年前の乳房炎発生頭数は、年間延べ99頭でした。このうち、大腸菌群を原因とする乳房炎は全体の58%を占めていました。



この農場で1年間かけて、ワクチンをうった牛とうってない牛をそれぞれ84頭ずつ用意し、分娩後の乳房炎発生状況を1年間追跡しました。ワクチンは、用法に従って分娩予定日6週前と2週前の合計2回うちました。



結果はグラフのとおりです。ワクチンをうっても大腸菌性の乳房炎にかかる牛が減ったわけではありませんが、点滴治療を必要とせず乳房軟膏のみで治癒する牛が多く、廃用になる牛も極端に少なくなりました。つまり、ワクチンによって搾乳牛の大腸菌に対する免疫力が強化され、大腸菌性乳房炎の重症度を軽減した可能性があるのではないかと考えられました。

(厚岸家畜診療所診療課)

最後に大切なことを。大腸

谷 拓海